



昭和49年(1974年)

7月号(No. 349)

社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

定価一部 100円

目次

本文

- 積雪期の奥又白谷の記録を求めて……山崎安治…… 1
九州におけるウエストン師の足跡を尋ねて……石原憲治…… 3
山下一夫氏の一周年を迎えて……今井雄二…… 5

行事・報告

- 第28回ウエストン祭
尾崎喜八先生追慕の集い……小倉 厚…… 2
ソビエトのアルピニスト達と②
(U.I.A.A 1973年10月)……田村俊介…… 4
御在所岳の氷壁登攀……中島 寛・浅見正夫…… 5

海外からのたより

- ガルツェン遺児よりの感謝の手紙……沖 九人…… 6
インド便り……黒石 恒…… 6
マナスル通信(1)(2)……古畑 勇…… 7
日本大学ヤルン・カン登山隊より……須田紀子…… 7
インドより……清水春美…… 7

て「登山とスキー」十二号があげられていた。また諏訪多氏は十一番目の記録に「わらち」四号に記されている昭和八年三月の記録も載せている。

ここで当然調べなければならぬのは「登山とスキー」十二号である。またこの一年の八月に国塩氏によってなされるまで何人も手をつけられていなかった。普通通中又白谷と呼ばれている奥又白谷の一支流の源頭にある又白池を根拠地としたことは、確かにこの登攀の成功した大きな要因の一つである。これから上、頂上までは地形が甚だしく複雑で簡単に述べられないからここには省略する。同氏はこの登攀は大したものではないと謙遜せられたが、その正当なる価値については将来が証明するであろう。なおこの登攀の詳細については近く「山岳」誌上に発表されるはずである。

積雪期の奥又白谷の記録を求めて

山崎 安治

穂高岳奥又白谷積雪期初登の正確な記録を求めてかなりの歳月を要した。むろんこれについては、松本高校山岳部の部報「わらち」第四号(昭和十三年十月発行)の「奥又白谷について」(山崎次夫、牧野康夫、恩地裕)に載っている。奥又白谷登攀の歴史で「昭和八年三月先輩菅野氏、中村氏、澤本氏等の松高パーティーは奥又白谷を登り更に池の上部よりA沢を登って初めて積雪期においてこの谷よりするパリエーション・ルートの登攀に成功した」と簡単に報告がされていた。積雪期における穂高岳の登攀は、昭和三年から五年の冬にわたって、一応厳冬の主要な峰頭の登頂が記録され、ついでパリエーション・ルートからの登攀が、第一線の登山者たちによりねらわれることになった。昭和六年三月には、懸案の槍、穂高縦走が慶大隊によって成功をみたのを皮切りとして、早大隊は甲南隊と共に天狗のヨル

から西穂高への初縦走を記録、同志社隊は前穂高、奥穂高、北穂高を縦走、昭和六年十二月から七年一月には、立大、学習院隊が前後して槍、穂高の厳冬期初縦走し、東大、松高合同隊は奥穂高南稜、さらに岳川谷のコブ尾根が東大隊により初登され、同じ日松高隊はこれを下降。また東大隊は、奥穂、前穂、明神岳最南峰の初縦走を記録、そして昭和七年春には早大隊により北穂高の滝谷がトレスされた。また昭和七年十二月には松高隊により前穂高北尾根屏風岩の初登が記録されるなど、さまざまな活気にあふれた時代だったのである。

こういう積雪期におけるパリエーション時代を背景にして、松高隊の奥又白谷からの前穂高登頂は、なんとかもったくわい記録が知りたかった。しかし調べにくいうちに、どうしても計算にあわぬ事実が気が付いた。東京慈恵会医科大学山岳部といえ

ば、昭和十年前後、積雪期の奥又白谷で、武蔵見氏らを中心に、前穂高東面、中又白谷の登攀などすばらしいパイオニア・ワークを行っているのだが、その部報「JOCH」三号に載っている前穂高又白谷の中の「登高記録」文獻(主として昭和八年までのもの)という付記に奥又白谷の登攀記録として「松高、昭和七年三月(登山とスキー十二号)パーティー三人、横尾岩小舎より二回、松高ルンゼを登り、又白池を経て、奥又尾根を途中まで登り、三回目に掠奪点より松高尾根に取付き前穂に至りAルンゼを下って帰る」と記されているのを発見した。

これと「わらち」四号のものは一年ずれがある。ところでまた一つ問題がでてきた。諏訪多栄蔵氏の著作「穂高岳・登攀ルート図集」(昭和二十四年朋文堂刊)の奥又白谷の登攀小史の中に六番目の記録として「一九三三年三月三日、松高三名、松高ルンゼを登り又白池を経て三回のアタックの後掠奪点より松高尾根にとりつき前穂へ出、A沢を下る」とほぼ「JOCH」三号と同様なことが書かれている。しかしこれは三月三日とはっきり書かれている点が違っており、その文献とし

二月発行の第七号から「登山とスキー」に改題された。十一号までは隔月刊であったが、十二号からは月刊となった。この十二号の発行は昭和七年十二月で、「黒田正夫氏の『登山術』を批判す」(西岡一雄)、「西岡一雄氏の批判に答ふ」(黒田正夫)など、まことに興味ある記事はあるが、松高の記録など影もかたらない。どうもキツネにつまれたような恰好であった。日本山岳会の図書室には、最初のほうはそろっているが、後はところどころ欠がある。しかし苦心の末、杉並の古書展で、やっと問題の「登山とスキー」を見つけ出すことが出来た。十二号ではなく、昭和八年十二月号だったのである。「J.O.C.H」にこのことが正確に書かれていなかったのが混乱のもとだったわけである。

「冬期登山研究・積雪期の奥又白谷」と題し、松本高校山岳部の名で、積雪期におけるこの谷の概念と、昭和七年三月の初登攀の記録が報告されている。

中村謙次、菅能廣一、橋本文彦の三名は、昭和七年三月十八日横尾岩小舎より奥又白谷に入り、松高ルンゼを登り、奥又尾根寄りに天幕を張り露営、十九日奥又尾根に取り付いたが天候が悪化したため退却する。三月二十三日再度二五〇〇m付近まで達したが降雪のため登高を阻止され、三月二十四日(記録には十九日とあるがこれは二十四日の誤りであろう)ようやく前穂高登頂に成功している。

『岩小舎(一・〇〇) ススキー・デポ(二・〇〇) 一・三〇〇』奥又尾根(五・〇〇) 五・三〇〇 一掠奪点(七・三〇) 一七・五〇 一岩稜末端(九・三〇) 一〇・〇〇 一前穂高頂上(一・〇〇) 一〇・〇〇 一ススキー・デポ(五・〇〇) 一岩小舎(六・〇〇)

ルートは前日に同じである。前二回に比して多少雪はしまっている。

たけれどもやはり相当もぐった。三人交互にラッセルを続け、ぐんぐん登るにつれて粉雪に変わり、尾根に出るまでは相当苦労した。尾根筋の雪も軽いクラストのみで輪かんじきもあり役に立たない。二六〇〇m付近より尾根を捨てて中又白谷側から奥又尾根の掠奪点に出た。この掠奪点を越え、奥又尾根と主稜線とのジャンクシン付近から奥又白谷に落ち込む急峻なルンゼの下端に出てこれを登れば簡単に主稜線に出られるのであるが、ラッセルを嫌ってこのルンゼの右手の岩稜にルートをとった。これは頂上に近い主稜線より東南に伸びた前穂バットレス左側の短い岩稜である。岩稜への取付き点は掠奪点より最近のリンネであったが、この取付きは雪が不安定のためかなり悪いもので慎重を要した。リッジに出て初めてアイゼンをはき綱を結びようやくクライミングの気分が味わえる。リッジ下半は鋭い雪稜であるが上半は相当面白い岩場で傾斜も相当なものである。一カ所面白いチムニーがあった。岩稜を登り切ると主稜線に出る。ここからは稜線伝いに簡単に頂上に達する。頂上着は午後一時であった。帰路は岩稜左手のルンゼによった。か、登路と全く同じである。天候は終日快晴。日中は強い日射にかなりぐずついたものとなったが、スノーホールの落下以外に雪崩の発生は見なかった。

この記録には登攀日が三月十九日、晴、とあり、また終日快晴となっている。ルートは前日と同じとあるところから三月二十四日と推定される。当時入山していた慶大の記録では、当日曇後薄日です、とあり、また早大の記録は、曇りとなっている。晴天は三月二十五、六日で、とくに二十六日は快晴無風であったというから、あるいは三月二十六日も思われる。(七四・四・六)

第28回ウエストン祭

尾崎喜八先生追慕の集い

日本アルプスを広く世界に紹介したW・ウエストンの業績をしのぶ第二十八回の「ウエストン祭」が、日本山岳会・信濃支部主催のもと、さる六月二日上高地で開催された。本年は、例年雨の中のお祭りのイメージからはほど遠く。抜けるような澄み切った青空の下、日高、横根など日本山岳会の長老をはじめ、約千人の岳人が集まり、極めて盛況裡に行われた。

まず、主催者を代表して日本山岳会の奥原信濃支部長、織内副会長によってそれぞれ歓迎の挨拶とウエストン師の業績などが述べられた。ついで、お祭のクライマックス、ウエストン師のレリーフに献花と献歌。献花は「山の歌」をバックメーリックに、安曇小学校の四年生宮本順子、上条伊津美さんの二人によって厳しゆくに、師の遺徳と山の安全を祈り、花束がレリーフに捧げられた。献歌はエーデルワイスの合唱による、岡村先生作詩、辻莊一氏作曲になる「ウエストン祭の歌」。そして、尾崎氏に対して全員黙祷。

地元安曇村、松本市、波田町など八つの協賛団体を代表して、安曇村の福島清喜村長によって来賓祝辞がついで行われた。福島村長は「ウエストン師の教えを守り山を愛して欲しい。そして来年もまた参加を待っています」と力強い言葉が述べられた。記念講演としては日本山岳会の名譽会員・日高信六郎氏と日山協副会長、日本山岳会の評議員でもある渡辺公平の両氏が壇上に立たれた。日高氏は日本山岳会の最長老のひとりとして、実際に接触された老に亡った古い多くの偉大な先人を偲ぶ会場の人々の共感をよんだ。渡辺氏は日本山岳会の自然保護委員会の委員長として「すでに保護の時代から自然防衛の時代になった。皆さんと一緒にこの自然を防衛しよう」と訴えられた。追記・今年のバジは「タカネスミレ」

ウエストン祭

午前十時三十分、美しい梓川のほとり、エーデルワイスによる「飲みの歌」が流れ、日本山岳会浦生信濃副支部長の司会で祭典の幕が下された。



献花(上)と献歌(下)



高田忠四郎氏 尾崎先生と信濃支部の因縁は深く、先生の富士見高原時代には二代目の支部長をしていた。詩人としての岳人としての先生との山行は楽しいもので、とくに鳥の話に詳しく私と話が合った。ウエストン祭の先生の詩の朗読は今でも感銘深い。横有恒氏 私と尾崎さんと生前あまり親交はなかったが、それでいてお亡くなりになった今は非常に耐え難いほど懐しくまた慕わしい。自然に対して深い愛情をもち詩を通してわれわれを教えた。尾崎さんは孤高に生き本当の詩人であった。生前もつとお話を伺っておけばよかった、惜しい人をつ失った。(小倉厚記)



尾崎喜八先生追慕の集い

ウエストン祭終了後、表記の集いは小裂平の人口、ビクター・センター(自然教室)で午後一時半より、実末亡人と子供さん、お孫さんの三人を迎えて厳かに開かれた。

まず、尾崎さんと親交のあった高山忠四朗日本山岳会顧問、日本山岳会の名譽会員の横有恒氏の追悼の言葉があり(雲谷良樹)、ついで信濃支部員であり清水悟郎氏から尾崎先生の詩の説明と録音テープに残された生前の声の会場に流され、会場の人々は懐しさに涙した。そのあと、実末亡人からの謝辞があり、この偉大な詩人を慕う集いの幕を閉じた。

九州における ウエストン師の 足跡を尋ねて

石原憲治

昭和十一年朋文堂発行の九州山岳第一輯には加藤君が「祖母山より傾山まで」と題して祖母山の地形、植物、登山道等について約二ページの記述がありその内に「彼の有名なウォルター・ウエストン氏が明治二十年頃、九州第一の高山として祖母登山を遂行したのも、このコースであったことを付記して置く」と記してあるが、恐らく確実な文献によられたものではなかったと思われる。

一、はじめに
私は若い時から山村に民家を訪ねて歩き、九州に行ったとき、加藤数功君と相知るようになった。加藤君はとくに九重山群に興味を持ち「九重の生き字引き」として知られ、自らも任じていた。同時に彼は民家にも興味をもっていたので私を案内して、民家を見て歩くことを楽しんでいられた。私が行くたびに一週間くらいの日程で国東半島から耶馬溪を訪ねたり、由布院から日田市に入って旧日田商人の代表的草野忠右衛門邸を尋ねたりした。

私はいつか彼と山を歩いた時、ウエストン師が日本に来て九州の山に初めて登られたことをきいたので、ぜひそれを尋ねる約束をしていた。加藤君もウエストン師の九州における足跡を調査することについては前から熱意をもっていたらたようであったが、充分の資料がなかったようである。

しかしその後大分県と宮崎県共同の祖母山、傾山自然公園開発促進協議会が設置されて、この地域を国立公園として国に指定方陳情に当り加藤君が委嘱されて、新たに、祖母、傾、大崩山塊を加えた地域の調査地図を作製されたので、その際祖母山一帯を調査されたに相違ないと思う。しかしこの地図の説明書にはウエストンの氏名は現わ

れていない。

の日本における最初の山行と思われる祖母山に加藤君とともにその足跡を訪ねることを約したのには一九六〇年の十一月のことであった。

二、河内部落を訪ねる

その年十月末日から鹿児島市で開催された日本人類学会民族学会連合大会に出席して、十一月三日の見学旅行に加わり、正午阿蘇山頂で解散後単独で阿蘇山の南の斜面を山麓の高森部落に下り、そこからバスで高千穂町に夕方到着し、加藤君を迎えられて、部落の中央にある天国旅館といういかめしい名の旅館に泊ることになり、地元の加藤君の数人の友人と土地の伝説や民俗芸能などについて話をきいた。とくに年末から正月にかけて、高千穂若戸祭三十三番が催されるのでぜひ改めてきてくれるようにとさそわれた。

翌四日朝、夕べの加藤君の友人の方より加わりいっしょに出かけた。初めに町役場に寄り先年小生が、この町の民家を調査した節案内していただいたので、ちょっと立ち寄りて挨拶した後、バスに乗って河内部落まで行き、その夜泊る予定の成喜屋旅館に入つて、荷物をおろして、直ちに昔ウエストン師が泊られたという鍛冶屋まで案内してもらった。内部を自由にらせて頂くことになった。

この建物に行く道を少し下って明治橋という石橋の手前右側に昔の鍛冶屋の住居があるが、現在の建物は四間取りの普通の住宅で、その向いの道沿の左側に少し高くなった敷地に土蔵が建っていた。これは三間に五間の二階造りで、昔は竹瓦葺であったが後にトタン葺になったようである。

私達は二階に上って見たが十一畳の量の長四畳の室が二室、それに一部四坪の四方を壁で囲った部分があつて、この内には入れないようになってい

た。これはこの下の一階の八畳座敷の床の間に神様が祭つてあるのでその上部の二階の床を踏まないために締切つてあるという話であつた。

僕は何かウエストン師が泊られた証拠になるものはないかと室内を探して見たが、古いインキ壺があつたように記憶している。僕は室の周囲に長押があるので、その裏側の隙間を探して見たが、ここには永年のほこりがたまっていて、一つ竹をけつて弓なりに曲げ、その弓の中央に二つの穴をあけて、これにひもを通して結んであつた。これを釘にかけると、簡単な洋服掛けに使われたものではないかと思われ。

その夜私は成喜屋旅館に泊り、夕食後元村長富高金作氏宅を訪ねて昔ウエストン師が滞在された頃の話をつきいた。富高氏の話によるとウエストン師が泊られた頃は先代富高槌治氏の時であつたという。鍛冶屋の家は嘉永三年に建てられた当時は七ヶ町村の大庄屋であり、また村廻りという役目をもつて賦役制で人夫を使用していたということである。明治二十年頃から二十七年頃には毎年神戸の英国聖公会からよくジョンプラン宣教師がこられ、そのほかウカステス監督、明治二十四年四月三日にアーカ・リー総監督が、明治二十六年八月十六日にはエビントン師が来て泊つたという。これらのことはこの地がイギリス聖公会の人達にとって軽井沢のような休養地であつたらしい。

彼はまた大郎（サライロ）部落に泊つて毎年熊本から空閑氏が連れて来たという。それは明治二十年頃から二十七年にガランド氏もこられた。彼は極東日記を書いているということである。ガランド氏はすでに一八七九年に嘉蘭治の案内で槍ヶ岳に登山されており、彼は英国公使アーネスト・サウトの友人ということであるから、ウエストン氏が日本に赴任される前から、

英国のアルプス登山の伝統が神戸の宣教師の間に盛んになつていゝと思われ。したがってウエストン師は二十七歳で日本にこられて周囲の登山家の友人達とともに登山を初められたか、またはすでにイギリスでどのような登山訓練をされたか私は解らないが、少なくとも神戸のグルーブの影響を受けたと解してさしつかえないのではあるまいか、私はもう少し師の若き日の生活の資料が得られるなら幸いだと思つていた。

三、祖母山登山

十一月五日朝七時三十分にはわれわれはバスで、河内の成喜屋旅館を出発して五ヶ所部落で下車、矢津田義武氏邸を訪れた。この宅の入口には大きい酒樽の丸い底を利用して正方形の枠に入れた左右の門柱の上の梁の中央に吊して、これを回転して入るようになっていたが、われわれはまずこの面白い工夫に感心させられた。門を入つて二十m位もあつたらうか、ゆるい坂道を上つた処に正面に母家があり、右前に家畜小屋のまや（厩）と肥倉の一棟があつた。

母家は間口十一間、奥行四間半の堂々たる純家である。われわれが入口から入つた時、合沢義とていう方が出迎えてくれた。矢津田氏宅玄関といつても農家であるから、この地方でござんといふ茶の間の正面にちよとした玄関構えがあるに過ぎない。

矢津田氏

矢津田氏はご夫妻で玄関で挨拶され、来意を告げたと、奥様が矢津田先代の古日記を持参し開いて見せて下さる。そこにはつぎのように筆記してあつた。

矢津田鷹太郎一八九〇年の日記より「明治二十三年十一月六日、晴天」

英人ジョンプラン・ドララン君及神戸在留同国人エドワード氏同道ニテ祖母山往復共立寄ラリ河内泊リノ由

右の日誌によるとウエストン師は熊本在留のフランドラン氏の案内によって来訪され、その足で祖母山に登山して帰られたようである。われわれはこの一八九〇年の日誌を見てもうって、ウエストン師が日本にきて初めて九州に行かれたものと思う。師はその後翌年九一年から神戸内に入っているから、それまで、八八年来日して以来祖母山登山までの三年間にどこかの山行を試みられたかも知れないが、知る由もないままになっている。おそろく赴任早々で山行の余裕がなかったのである。

その日われわれ二人は矢津田氏に別れをつけて、かつてウエストン師が友人と登られた祖母山に登頂するために出発したのは午前十時過ぎであった。矢津田氏は案内人として夫の甲斐良君が同行して僕の鹿兒島からの重いリュックサックをもってもらったので楽になった。われわれは登山の途次ウエストン師が登られた足跡を互いに語り合いつつながら踏みしめて記念すべき山行を試みることができた。途中初めに休みの鳥居の前で、つぎに展望台でひと休みして断崖の上から遠く大分県の奥岳川の溪谷を眺めた。午後二時過ぎ頂上に立ったが、折悪しくガスで見晴しかなかった。おそろくウエストン師はここで元の道を引き返して五ヶ所部落に下山されたのであった。

われわれはここで夫甲斐君と別れて、北側の大分県側の斜面を少しく下ったところにある山小屋で弁当を食べ、右側奥岳川溪谷上流にある元鉱山部落尾平に下山してその紅葉屋旅館に六時宿に到着宿泊した。この鉱山は五百年の歴史を有し繁栄した部落であったが、今は昔の面影はなく、翌朝ここをバスで溪谷沿いの道を緒方町に下った。東側に聳える傾山の連山の古世

層特有の突元(こつ)とした岩石の景観は珍らしく、加うるに原生林相の美しさは全く九州の外には見られないものだ。加藤君の賛美の言葉を繰り返さずきくにつれて私も自らこれらをうなずくのであった。またこの溪谷には珍しい鳥獣魚類が沢山生存して豊富な自然生態が保存されているということである。山を下って溪流に架けられた釣り橋から山容を振り返り見てその美に感嘆した。

加藤君はこの溪谷美を保存したいという強い念願をもっていることを話していた。そして祖母山自然公園調査書の中にこの自然環境は大自然博物館であるからこれを永久に保護し施設整備を行い国民の保健休養のため国定公園に指定されんことを述べていたが、彼はその後間もなく病に仆れられたことは返す、がえすも残念である。謹んで

ソヴェトのアルピニスト達と② (U・I・A・A一九七三年十月)

海外連絡委員 田村俊介

二六日はカフカス山脈の十文字峠(二、三八四m)を越えて、カズベク山(五、〇四五m)の登山基地カズベキ村へ泊旅行に出発した。これは南から北へグルジャ軍用道路沿いにカフカス山脈の鞍部を乗越え、カフカス山脈の北山へ出る旅である。以前に私はこのルートを通りながら南へ抜けた。アラグヴィ川に沿って北上し、ムレチという小村より山道にさしかかるのだが、ムレチまで屋敷をとり、かつてのグルジャの首都であったムツヘタの古い寺院を見物したりしている内に、ムレチ村に着いた時はもう午後三時頃だった。その時は天候が悪化し始めており、峠はきつと吹雪で、山道は氷化しているということであった。こま

氏のご冥福を祈る。
四、終りに

九州におけるウエストン師の足跡を調べることは加藤君も熱心に考えていられたので、さらに遇って師の日本における行動と生活の資料を得たいと考えていたが、加藤君が亡くなったので頓挫した。一つの方法は聖公会の古い記録を探ることであるから、友人に照会して調べたいとも思っているが、そのために、これだけの記述が発表されると、これによってさらに関係者の記憶を引きだす一助ともなることを期待して、不備ながら一応発表することにした。現地のきき取り方に不備の点や、きき違いがあることを恐れるが、これによって、何らかの訂正または追加資料が得られるならば望外の幸いである。(一九七四・三月十一日)

で私達は二台のバスに分乗して来ていたが、一台のおんぼろバスは帰し、一台のバスと三台の乗用車で峠を越すことになった。鈴木氏と私はバスからオタリ・ハガラセの乗用車に乗り換え、車はぐんぐん高度を上げ切り立った断崖沿いの道を行った。アラグヴィ川はもうはるか下に細い糸となって流れている。周囲は昨夜来の雪にすっかりおおわれ、道は氷化していた。アラグヴィ溪谷をへだてた向うは、鋭い岩稜に雪を付けたカフカス前山が連なるは、へばり付くようにして羊の群がたむろしている。華麗なヨーロッパ・アルプスに比べれば、何と荒涼としていることか。峠に着いた時は、強風が吹

き荒れ視界はほとんど利かなかった。私達は後続のバスを待たずに、すぐ北斜面を下って行った。氷でつるつるになった道を普通のタイヤで、オタリはスリップすることもなく、すっかり暗くなったカズベキ村まで、無事運んできた。

翌朝六時、眼が覚めてカーテンを開くと、雲一つない快晴で、目前にはカズベク山が谷間からその全容を現わしていた。頂上は、折しも朝日に映えて火が燃えるように赤かった。ギリシャ神話でゼウスが火を盗んだため、鷲に内臓をさばられたというが、その山がこのカズベク山だろうと云われている。ホテルからすぐ近くのレストランで朝食をとった。レストランの窓からも真正面に堂々たる円錐形のカズベクが居座っているのが眺められる。朝食後に二組の青年と乙女がグルジャ・ダンスのレズギンカを民族衣装をつけて踊ってくれた。カズベキ滞りの半日は晴天で山麓を散策し帰路についた。

二八日は東グルジャのカヘチヤ地方へ案内された。ここはソ連の有名なブドウ酒が生産されているところである。トビリシから東へ向い、ゴムボル丘陵を南から北へ乗越すと、アラザニ溪谷へと道は下って行く。峠からは北方に雪をまとった東カフカス山脈が白い障壁となって立ち上りだかっている。この東カフカス主脈とゴムボル丘陵にはさまれたアラザニ溪谷は、ロシア語では溪谷と名付けられているが、われわれの感覚では平野または盆地という方が当てはまる。広々としたこの溪谷沿いには、チナンダリ、ムクザニ、グルジアニ、などのソ連の代表的なブドウ酒の産地が集っており、その銘柄はその村の名で呼ばれている。

道中、同じバスに乗り合せたソ連のアルピニスト、チエルヌイシエフと話していると、彼は私の仕事の上で一番

関係の深いソ連貿易社に勤めているとのことである。それも私の石油の仕事と大いに関係のある原料輸入総局で、われわれ二人は一挙に長年の友となった。彼はスポーツ・マスターで、今年の夏にはイギリスで行われた岩登り大会にソ連代表として参加したということであった。

また同じバスに、ソ連の代表的アルピニストで、日本にも来たクジミンもいた。彼はソ連の七千m峰に十数回も登頂している勇者である。一九七四年にはヒマラヤの八千m峰(多分ダウラギリになるだろう)と云われている。小柄で口数の少ない人だが、内に秘められた闘志はソ連の中でも一二を争う超一級のアルピニストである。恐らくアバラーコフ兄弟やヘルベッタ西壁で墜死したグルジャのヘルギアニ等とともにソ連山岳史に名を残すアルピニストであろう。彼についてのエピソードはしばしば耳にする。例えば、ピーク・コムニズムに登った時など、仕事で忙しかったため一番後から遠征隊に参加した。そして高度馴化もせず、いきなり登頂し、さつと下降してその足でアスツェハイ・ダムの建設に参加するために、エジプトに飛んで行ったという。この話はヘルギアニの後をうけて、ソ連岩登り大会で優勝したスラヴァ・オニシエンコに聞いたのだが、オニシエンコは、クジミンの肺活量は恐らく桁はずれに大きいのだらうといった。また、彼はグルジャ山岳会の連中と一緒にピーク・パベータに登った時、荒天候のため七千mの稜線で行方を断ち、絶望視されていたのに、何日かのフォースト・ビバークの後、奇蹟的にたった一人生還したこともあったという。彼曰く、私は仕事が忙しくて(ダム建設のエンジニア)毎年山に入ることを保証されていない。これは残念なことだ

今井雄二

山下一夫氏の
一周忌を迎えて

四月十四日、山下氏は、山下一夫氏の一周忌に当たる。早くも一年たったという感慨とともに、まだ印象が生々しく、生前の思い出を語る心境にはなれない。ここでは、この一年間の氏に関する二、三の情報を書いて、知友の方々にお知らせしたい。

が、ワイタリー・アパラーコフのように全生涯を山に捧げることができた状態であつたら、私の山もこんなに長続きはしなかったかも知れない。仕事に追われながら山を想う。その時ほんとうに山の持つ味というか、山はどういうものかをより深く認識することができた。彼のゆつくりした口調には、アパラーコフとはまた別の山に憑かれた男の情熱を、見せつけられた。

この日は昼食抜きで走り回り、山腹の洞穴の中につくられたブドウ酒の貯蔵庫を見学した。ただ見物だけで、一滴も飲ませてくれなかった。酒の好きなアルベルト・エグラーはぶつぶついていた。夕方、すでに黄昏が降りはじめた頃、やつと山中の山小屋風レストランで遅い屋敷にありついていた。これがUIAの最後の集いとなったが、この席上、アギ・アパシゼは数日前に日本のアルピニスト二人がエヴェレストの頂上に立ったといつて、日本のアルピニストのために乾杯してくれた。グルジャのアギの友人がVOAで聞いたとこのことであつた。

二十九日、私達UIA参加者はグル

ジャ山岳会の人達の見送りを受けて、トビシリを去った。三十分程の飛行で機はカフカス山脈上空にさしかかった。雲は多かったが、西の方にひときわ抜きでエリブラス山が、その大山塊を覗かせており、黒々とした山稜がそこから南東に延々と伸び、私達の眼下まで続いており、そこにはコシタン・タウヤディフ・タウなどの五千m峰が舞き合っている。ベゼンギ山塊が大きく盛り上っている。機の下にはカズベクのピラミッドがあつた。明瞭に個々の山が判別でき、眼下に大カフカス山脈が長く壮大に怒濤となつて横たわっていた。良き山々、良き人々、そしてこれらを取り囲むカフカスのおおらかな野生のものと、また帰ってくる日のことを私は思った。そして、とりわけ例外的に私達日本人を心より歓待してくれた、セルゲイ・タバタゼ、オタル・ギネイシビリ、アギ・アパシゼ、ミト・ダンガゼ、オタリ・ハガラツゼ、レヴァス・ハガラツゼ、ギビ・カルツェリシビリの諸氏とその他のグルジャの岳人、それにソ連ア連盟の諸氏に心より感謝しつつ、カフカスに別れを告げた。

山下氏の植物愛好の熱意と造詣については周知の通りであるが、その生涯を通じて採集された老大な植物標本は、その後どうなつたか。これに関心をもちた方も少なくないであろう。これについては、つぎのような経緯で、果立山形博物館に永久保存されることになったから喜んでいただきたい。

太平歳氏を伯父にもち、植物愛好家で標本製作も兼業していた山下源五郎氏を父として生まれた氏が、生涯を山と植物研究に打ち込むようになったのは、ごく自然の成り行きであつたといえよう。幼時から山に親しみ、中学時代から本格的な植物採集を始め、病に

倒れる直前まで、約五十年間採集しつづけてきた。その成果である植物標本は約五千点に達したといわれる。この標本は長らく交通博物館の一室に保管されていたが、氏が昭和四十年、博物館長を退任してから、他にこの標本だけのものを移す場所もなく、そのままになっていた。しかし氏が亡くなるといふ不幸な事態が起つて、その処置をどうしたものか、家族の方や友人は心を傷めた。幸い本会山形支部長後藤幹次氏が斡旋されて、山形市に新しく開設された果立博物館に寄贈することに話が決まった。

昨年六月、植物学にも造詣の深い結城嘉美博物館長が山下滋子夫人を訪ね、その標本を見て驚嘆されたという。それには採集場所、年月日など明記されていて、五十年も以前のもので含まれているとは思えない立派な標本ばかりであつた。そこで九月十二日、館員が出張してきて、二日間積みトトラックに満載して発送、翌十三日博物館に収められた。館では「山下一夫コレクション」というコーナーを設けて一般に公開することにした。これで山下氏が生涯をかけたコレクションが、ここに恰好の場所を得たわけで、氏の霊も喜んでいることであろう。

この老大な標本の整理には一年以上もかかるだろうといわれるが、整理のすんだ分順次陳列して公開されている。山形方面へ行かれる方は、ぜひとも霞城町の博物館に立ち寄って、故人の業績を見ていただきたい。

つぎに山下氏は、エーデルワイス・クラブ創立以来、クラブの顧問として熱心な後援者であつた。いつも会員と山行をともにして、植物研究やスケッチ画法の指導に力を入れていた。その恩義を受けた会員たちが、昨年六月二十四日、滋子夫人を加え、坂倉会長は

か二十九名が龍ノ登山に追悼山行を行った。車坂峠から石楠花のつぼみもふくらんだ龍ノ登山を越え、山下氏が好んだ池ノ平の草原に写真を取り、好物の酒と花を供えて、思い入る歌を合唱した。そのとき会員の一人在山下氏の作詩「老道松」を朗読したら、みんなの涙が止まらなかったということである。このエーデルワイス・クラブでは、会員が所蔵している山下氏遺作の絵をもち寄って、四月十九日から二十一日まで、池袋の豊島区民センターで「山下一夫山の花の絵遺作展」を開催した。油や水彩の風景のほかに、定評のある植物のスケッチが多数展示された。

最後にもう一つ、氏の遺稿とスケッチを選んて一冊にまとめ、若溪堂から出版される計画が進んでいる。これは渡辺公平氏が滋子夫人に語って編集されたものである。若溪堂といえば、坂本直行氏の「雪原の足あと」大島堅造氏の「山の古典と共に足立源一郎氏の「日本の山旅」など名著の編集には山下氏が当たったもので、当時氏がそれに注いだ熱情にはみなみなならぬものがあつた。そうした友人先輩の出版には非常な熱意を示したにもかかわらず、彼自身の著作をだそうとしたことはなかった。氏は山や植物に関しては、極めて厳しい態度を以てしており、その厳しさは彼自身の著作にも向けられていたように思われる。その真剣さが安易に自著の出版に踏み切らせなかったのではないかと思う。しかしいつかは自著を公刊したい意志があつたかも知れない。いまは事情が違う。親友の手によって、彼が他の人の著作に尽したと同じことが、自分自身に帰ってきたことに満足の微笑を見せていることである。その本の刊行が待たれる。

(一九七四・四・一四記)

御在所岳の水壁登攀

中島寛
浅見正夫

○一九七四年二月九日(十一日)

○場所、御在所日向小屋
および藤内壁

○参加者

原真、中島寛、阿部和行、松本竜雄、浅見正夫、高田直樹、池田常道、池沼慧、熊谷猛、小栗嘉浩、堀田誠三、馬場和一、蟹江武士、杉下懐夫、手島信隆、曾我謹昭、蟹江正子、林すがも

高所登山委員会を作ろうとしたそもその意図は、エベレスト登山をはじめとして、過去のヒマラヤ登山の経験を集積し、体系化してゆくということであつた。そして、その底流には若手会員を中心に、実践への意欲に裏打ちされたサロンの場をもちたいという欲求があつたのである。

したがって、今回の御在所岳集会のような雰囲気に移して、高所登山を考え、かつ実践するグループができてゆけば、これまでになかったような活動ができる予感がある。それは理論と実践の統一であり、行為と認識の調和である。当面は高所登山のマニュアルを作ることが目標であるが、それをもとにして、あるいはそれを越えて、洗練された高所登山を実現することも期待できるのではないかと思う。

今回の集合は、そのためのステップとして、大きな意味をもった会であつたと思う。

九日、名古屋の原病院に集合した一行は、三台の車に分乗して南下、湯の山温泉から雪のなかを歩いて、十時過ぎに日向小屋着。早速、酒を飲みつづ

第4回高所登山委員会

の大議論が始まり、朝の四時過ぎまで続いた。論題は水雪技術。池沼君などは、自分でつくった水登り用のピトンで披露してくれた。そのうち議論は、原、高田両名の「三十万円ヒマラヤ登山」説の評価をめぐる論争になった。もちろん結論がでるはずはないが、それでも、ヒマラヤ登山を評価する上で、登山としての質をどう考えるべきかという核心的な部分に、的はしぼられて議論に熱が入った。

翌朝は吹雪。それでも、松本さんのいうように前夜の酒がアルカリ性のワインだったせいかどうか、大酒を飲んだわりにはすっきりした目覚めで、目的の水登りにでかける。「二日酔いではどうも登る気がしない」とふて寝の者も多かったが、もともと積極的だったのは、最年長ながら技術を磨くことに意欲的な阿部。雪の小止みになるのを待って小屋を出発したのは十二時だった。メンバーは、阿部、松本、原、中島、池沼、浅見、堀田。



御在所岳前尾根の登攀
—1974.2.27
(撮影 阿部和行)

「こぼれで登るから頼むぞ」なんていながら、登りきる。岩の表面には薄氷が張っており、多くのチームは退却していた。池沼君は人のいる場所を避けて登ったので、前尾根の最も困難なルート

壁になっている。お目当ての水登りは藤内沢第二ルンゼ奥股の水壁一ピッチのみだったが、池沼君がトップでルートを開き、後は珠数つながりだったとはいえ、けっこう緊張する一ピッチを大いに堪能した。このベッチを抜けた後の頂上までのラッセルは、しんと静まりかえった白一色の世界で、練習場のなかとはいえぬフィナーレだった。この夜の議論はことに多岐にわたった。もっとも話題が集中したのは、日本における極地登山の再検討ということだった。過去、わが国の登山界でもっともタクティクスの問題が真正面からとりあげられた時期は、多分、昭和十年代後半の極地法を中心とする登山様式が確立した時代だと思われるが、そのへんの問題を実証的に、当事者の意見を聞きつつ検討してみることが、今後の高所登山のあり方を考える上でも重要ではないかということになった。つまり日本における極地法の全盛時代がどのようにヒマラヤなどに近づいていかなる功罪を残したかということである。

十一日、今日も雪だったが、再度の実験篇で前尾根へ。参加者は阿部、松本、原、中島、浅見、池沼。この日は主として岩登りだったが、池沼君の見事なバランスと思いきりのよい登り方にひっぱられるようにして、時には「こぼれで登るから頼むぞ」なんていながら、登りきる。岩の表面には薄氷が張っており、多くのチームは退却していた。池沼君は人のいる場所を避けて登ったので、前尾根の最も困難なルートを最悪の条件で登攀することになった。この山行は、すばらしい食事であった。そう楽しいものになった。街のレストランでもそうめんに食べられそうもない美味いボルシチにびっくりしたが、聞けば熊谷さんは本職のシェフとか。まさに多士済々である。名古屋に住む東海支部の人達には、設備その他でも大いに世話になったことを誌上を借りて感謝したい。こういう会合なら何回やってもよい。夜を徹した議論もすぐに忘れて宿酔の重く苦い味だけが残るのが普通だが、今度の会合では、細部まで鮮明に思い出せるから不思議だ。実践をともなうのはじめて議論も生きてくる。このメンバー、この議論、この登攀。この企画の卓越さに改めて敬意を表する次第である。

海外からのたより

ガルツェン遺児より

感謝の手紙

このたび、ガルツェン・ノルプ氏の遺児、ハクバ・ノルプさんより三田前会長宛に、つぎのような感謝と今後の希望をよせた手紙が届きましたのでご紹介致します。

× × ×
拝啓、私は一九六一年に日本の登山隊に参加して遭難死したガルツェン・ノルプの息子であります。彼が亡くなった以後、貴殿と日本山岳会の皆様方が、私達遺族にやせられた、暖かいご親切な助力に對しましては、感謝の言葉もございません。
私はMYRSの生徒であり、お陰様でたった今、学校での教育を修了したところです。卒業の検定試験 (the Indian School Certificate examination) を最悪の条件で登攀することになった。この山行は、すばらしい食事であった。そう楽しいものになった。街のレストランでもそうめんに食べられそうもない美味いボルシチにびっくりしたが、聞けば熊谷さんは本職のシェフとか。まさに多士済々である。名古屋に住む東海支部の人達には、設備その他でも大いに世話になったことを誌上を借りて感謝したい。こういう会合なら何回やってもよい。夜を徹した議論もすぐに忘れて宿酔の重く苦い味だけが残るのが普通だが、今度の会合では、細部まで鮮明に思い出せるから不思議だ。実践をともなうのはじめて議論も生きてくる。このメンバー、この議論、この登攀。この企画の卓越さに改めて敬意を表する次第である。

インド便り

沖 允人

仕事の関係で、この一年間インドのCentral Building Research Instituteにきております。先日 (三月初め) ポンベイに行ってきたので、コリン氏と二・三度会いました。またヒマラヤン・クラブの会合 (映画会) があり、それにも顔をだしたりしました。ポンベイでの集会は、月一回くらい開かれ、集まりも家族などでも来て三、四十人という盛況です。ポンベイではClimbing Clubという会がアクティブに山へ行っているようです。ガルワルが外国人にオープンするということで、行ってみるつもりです。デリーにあるヒマラヤン・クラブの図書室へも、そのうちに寄ってみるつもりです。

だんだん暑くなってくるインドです。会の皆様によろしくお伝え下さい。(四月一日付、松田雄一宛) c/o Dr. V. Narasimhan, Central Building Research Institute, Room 100) も残り、目下、四月の第一週に判明する合格の発表を心配してまわっているところだ。ところで私は、今後の勉強を日本で行いたいという強い希望をもっています。もし貴方が私と私達家族に今まで与えて下さったと同様な財政的援助が可能なら、この点についてのご高配を是非お願いしたいと存じます。もしこのような教育が困難ならば、何か私に出来る仕事を紹介して戴けませんでしょうか。私は貴国に対し非常に強いあこがれをもっています。できますことならばもう一度、貴国を訪問することを希望するものであります。(三月一日付、三田幸夫宛)

マナスル通信 (1)

黒石 恒

ここマナスルのB・Cにも、春めいた天気の日があり、今日など朝の温度が二〇℃でした。午後から毎日ガスが湧き、雪がちらつき、B・Cにも一〇〜一五cmの積雪のある日もあります。東尾根にC II (五、九五〇m) を建設。ルートを延ばしてみましたが、日本で予想したとおり、非常に痩せ尾根で、岩稜につくナイフ・エッジを、荷上げのシエルバをとすのは、非常に困難なことがわかり、ルートをJAC ルートに変更することにし、明日より移動を開始します。シエルバもこの頃は、隊員より高所馴化が悪く、すでにC II (五、九五〇m) で頭痛を訴えて動かず、荷物も一五kgしか担げないという有様ではなはだ頼りなく、JAC ルートに移っても、それは変りないのではないかと思います。前途多難ですが、頑張りたいと思います。会の皆様によりしくお伝え下さい。(B・Cにて、四月八日付)

同

(2)

東尾根のルートを放棄して四月八日JAC ルートのB・Cに移りました。中世古隊員の話ですと、B・C ナイケ・コルとも、JAC の時と高度が一五〇m低いといっておりますが、高度計の誤差によるものではないかと思っています。私達はC Vまでしか作らないつもりですので、キャンプ間の高度差がありすぎるのではないかと心配しております。昨日はナイケ・コルよりすこし上部のC II よりC III へのルートを工作しております。今日は関田隊員がアイスフォール帯で工作しております。もう

日数がないので成功できますかどうか。
(四月十六日付、B・Cにて)
一信二信とも松田雄一宛一

日本大学ヤルン・カン

登山隊より

古畑 勇

前略、出発前はいへんお世話になりました。私達は二月一九日ターランを出発してから二日目、三月二日鳥海隊長と二人で、ヤルン氷河上五、二〇〇m地点にB・Cを建設致しました。(バーシの丘、五、四五〇m地点と考えましたが、積雪の状態が悪いので京大B・Cの上に建設しました。)東ネパールは四年前の偵察の時とちがい、インドルビーが全部ネパールビーに変わってしまいましたが、特徴です。隊は四月一日より登り始め、四月二日CIが五、九〇〇m地点に出来、四月七日前後にCIIが建設された後、五月十日前後登頂予定です。会員のみなさまによろしく。
(四月三日、事務局宛)

インドより——須田紀子

JACの皆さま

インドに来て、早、四カ月過ぎました。念願のガルワール入りを二月に計画し、インド登山財団(I・M・F)を通して許可をもらったつもりで安心して、日本より会員の清水春美さんが四月十二日やって来ましたが、いざ山への出発と、ウツタル・プラデシ州(U・P)のナニタール(Nainital)に来てからが大変でした。U・P州の入山許可がなかなかでず、約二週間予定より遅れ、その間、さすがインド好の私も「いらいら、いらいら」が続きインド流のペースにはまりましたが皆さんの親切のおかげで、この五月二日ようやく許可証を手にして、その一

枚の紙の重さに感謝を感じました。

五月三日アルモラ(ALMORA)よりバスでBagesh War, Kankeで約七時間ここで新鮮な野菜、果実が手に入らず、少々がっかりしています。バスをおり Kankeでボーターを六名とドンキー(ロバ)二頭で四時に歩きはじめ、月が満ちはじめた明るい夜道を九時 Lhakhetの立派なダークパンガローに到着して、本場にガルワールへの山旅が始まった実感がしました。昨日はここ Dhaktiのパンガローまでの道をゆっくり、ゆっくり楽しみながらヒマラヤのキャラバンを味わいました。

最後、徳本峠のようなところからのヒマラヤ、トリスルやナンダコット、そしてわれわれの目的地ビンドリ氷河をみて、暑いインドで待ったかいたが、あつたといれしくなり、目の下のパンガローまで疲れもわすれてかけ下りました。

どんな山旅になるかわかりませんが出来たらピークをと、夢みています。ビンドリ氷河には約二週間おります。いつ、ガルワール、クマオンがオーブンされるかわかりませんが立大のナンダコット隊以来、戦後はじめての日本人のクマオン地域への入山が出来たのも一九六八年の日印婦人合同隊以来のI・M・FとJACの交流のおかげと心よりお礼申し上げます。

(五月五日 子供の目)

追伸 シッキムでは西シッキムのベミヤンシンへ行き、四十数年前の三田幸夫氏以来かとも思いますが、カンチエンジンガ峰、カプール峰を目の前にながめ感激の一時をもちました。
(日本山岳会宛)

インドより——清水春美

こんにちは。BCにて二日目、あまりにも山が大きくて驚いています。ビ

ンドリ・グレイシャーから見るナンダコット、立教の方々が見たら感激するかもしれません。日本を出発する時はトレッキングのつもりが、こちらに来て Peakに登れたら登りたいと、二人して意欲満々でキャラバンを開始したのですが、ここに着いたら、少々、考え込んでしまいました。でも二週間のトレッキング許可ですから、時間がある限り、アタックしようと思っています。須田さんと一緒に、無理しないでしょう。五月末日には New Delhiにもどり、カトマンズへ二人でゆきます。日本人達に会えたら、思いきり日本語でおしゃべりしたい。ヤルン・カンの成功をお祈りしています。集会委員の皆さんによろしくお伝え下さい。私はやせもせず、食欲モリモリ。少し太った。おげんきで、さようなら、

5/8記 ウツトラ、ブラデッシュ、ヒマラヤ、ビンドリ、グレイシャーBCにて、(神崎忠男 宛)

あとがき 女性マナスル隊の快挙には快哉を叫びたいが、遭難者を一名だしたのは痛ましい。いよいよ本格的な夏山シーズンを迎える、遭難を人ごとと考えず安全登山をして欲しいと同時に、ウエストン祭で強張されたように自然保護に気を配ってもらいたい。山も次号で三五〇号になる。「目録」もつくらなければならぬ。編集者は忙しい。
(小倉)

昭和四十九年七月二十日発行

113 東京都文京区湯島一六六一
利根川商事株式会社

発行所 法人 日本山岳会

編集代表 山崎 安治

(813)二二八六(代表)

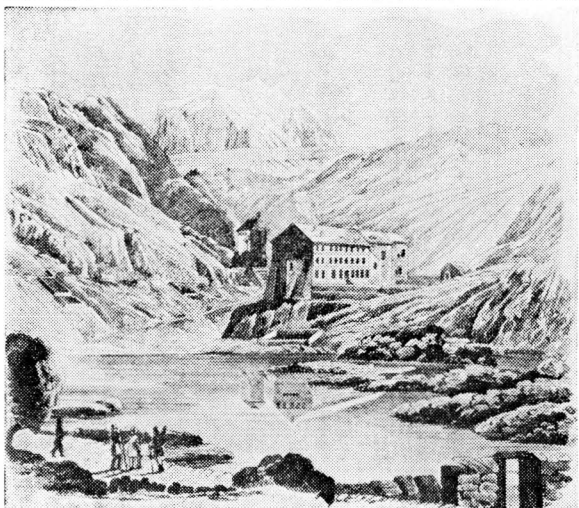
振替口座東京四八二九番

印刷所 東京都港区赤坂一丁目三番六号
株式会社 技報堂

松方三郎 〈新版〉

アルプス記

本書は、博識で知性の高い、世界的登山家松方三郎が、若き日の登攀紀行をまとめた名著『アルプス記』(昭和12龍星閣刊)を、晩年に当用漢字、新仮名に訂正加筆した新版である。著者は「その頃は、ロンドンに浦松がいたり、横さんが現われたりまた、宮様がこられたりした時代で、一人の人間の生涯のうち、あんなに山を思う存分味わう機会はないと思うくらいに、非常に楽しい山登りをアルプスでやった」と述懐している。新版は旧版よりも判型が大きく、一層吟味した造本である。菊判大型 丸背 三〇〇頁。口絵写真八頁。九月末刊行予定



龍星閣

東京都千代田区九段南4の8の34
電話(261) 9272 振替東京336

(特装版)
限定版番号入り。
総装装、絵入銅版
嵌込。天金。鉄入
定価 壱万六千円
予約締切七月底日
(普通版)
バクラム装、函入
定価 四六〇〇円
送料 各三〇〇円

茗溪堂＝山の本

東京都千代田区神田駿河台2の1・Tel(291)9442振替東京24723

遙かなる未踏の尾根

マカルー1970年
日本山岳会東海支部
＜B 5判430頁・カラー64頁＞定価4,800円

シブトンの自叙伝

未踏の山河

大賀二郎・倉知 敬訳
＜A 5判440頁＞定価1,900円

山に忘れたパイプ

藤島敏男著 ＜菊判584頁＞定価2,500円

森林・草原・氷河

加藤泰安著＜A 5判482頁＞定価1,500円

遠い山・近い山

望月達夫著 ＜B 6判334頁＞定価960円

山の古典と共に

大島堅造著＜四六判280頁＞定価1,500円

雪山・藪山

川崎精雄著
＜A 5変型判340頁＞定価1,200円

山日記1974年版

日本山岳会編
＜A 6判342頁＞定価850円

山 岳

日本山岳会編
＜A 5判＞
67年 2,500円
66年 2,300円
65年 2,000円
64年 2,000円
63年 2,200円
62年 2,000円
総索引 1,000円

山で唄う歌1集・2集

戸野 昭・朝倉 宏編
＜A 6判126頁＞1集240円・2集280円

屋久島・美しい豊かな自然

赤星 昌編 ＜B 6判202頁＞定価480円

日高山脈

北大山の会編
＜菊判362頁＞定価2,200円

原野から見た山

坂本直行画文集
＜B 5箱入布製本＞定価4,200円

雪原の足あと

坂本直行著＜B 5判206頁＞定価2,800円

日本の山旅

足立源一郎スケッチ帖
＜A変型208頁＞定価3,600円

いろいろばた

南会津山の会
＜B24とり判320頁＞定価1,900円

すこし昔の話

初見一雄著＜四六判400頁＞定価1,200円

ブータン感傷旅行

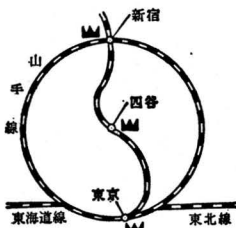
小方全弘著 ＜菊判280頁＞定価980円

登頂ゴジュンバ・カン

高橋 進編 ＜A 5判350頁＞定価900円

登山・スキー用具専門店

山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101
TEL. 06(362)5736●買いやすい
山の店●北へ来たら
山の店●フレッシュな
山の店

四谷店 東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432・1912
八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560・8575
新宿店 新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 6564
日本信販加盟店



山友社 たかはし

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9
片桐 盛之助
電話 東京(831) 1794・6680番

なるべし、なんとも
持たない方がいい
けれど、どうしても
要るものがある。
なほしう人間でずから
そして登山ですから
どうしても必要なもの
をこらえてみる
責任はもっています

かたるぐンティ
でんや 28128456
中央区八重洲4の1

香山荘

登山とスキー具

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1
PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘

東京店・中央区銀座3-5-7 (561)3600・(567)9031
東京店・中央区銀座3-4-6 (561)0966 スキー店
大阪店・北区曽根崎上1丁目47 (364) 0933 (代)
福岡店・須崎町1-4 (28) 3440



神谷名誉会員死去

本会名誉会員神谷恭氏は病氣療養中のところ、昭和四十九年五月二十日午前九時血液疾患のため池袋大山町の大病院で逝去された。享年八十四歳謹んで哀悼の意を表する。告別式は、五月二十四日午後一時から東京五反田の本立寺で行われ、本会から生花を献じ、松本善二、藤島敏男名誉会員をはじめ会員多数が列席した。

氏は大正九年六月十三日、中村清太郎、加賀正太郎両氏の紹介で入会。会員番号七四四番。昭和四十年名誉会員に推された。

告別式の席上、本会織内信彦副会長が別項の弔辞を読んだ。

弔辞

昨年の暮から病床にあった神谷さんがついに亡くなられた。心から哀悼の意を表する。

神谷さんほど日本山岳会とお酒を愛された方はなかった。日本山岳会のクラブとしての伝統をつちかわれ、そのバックボーンを生み出されたかけがのない会員の一人であった。日本の登山の父といわれた木暮理太郎翁の衣鉢を継ぎ、霧の旅会の創立メンバーとしてきわめて意欲的な山登りを実践された。大正九年中村清太郎、加賀正太郎両氏の紹介によって日本山岳会に入会されて以来、幹事、理事あるいは評議員として会務に尽力され、昭和四十年には名誉会員に推挙された。まさに日本山岳会の最長老のお一人であり、いつもルームの会合には欠かさず顔を出されていた。

代から、原宿、錦町をへて現在の桜井のルームで毎週開かれていた土曜会の集りの中心となって、その雰囲気盛り上げられていたのも神谷さんであった。

木暮理太郎翁や武田久吉博士らとともに親しく、理太郎翁亡きあとでも遺族とおつきあいが厚く、翁のありし日の面影を若い会員にとつと語られていた。その面からも神谷さんの日本山岳会への寄与は計り知れないほど深い。

いまここに神谷さんとの永久のお別れに当り、あのお元氣な姿を思い浮かべながら霊安かれとつしんでご冥福をお祈りする次第である。

昭和四十九年五月二十四日
日本山岳会会長 今西錦司

会務報告

五月理事会

(五月十日午後六時ルーム)

△出席者 織内副会長、板倉、伊倉、近藤、春田、宮下、浜野、神崎、松丸、原、山本、田村、浜口各理事、望月、山崎、金坂各評議員、高遠、三枝各委員、委任 今西会長、中屋副会長、大倉 婦山各理事

△議案

・信濃支部規約改正承認の件(板倉)
・支部長の交代(新支部長 奥原教永氏)について報告あり、これを承認。
・四十九年度年次晩餐会の件(伊倉)
場所を確保するためには、どこで開くかを早急に決める必要があるとのことで、十二月七日京王プラザホテルで行なうことに決定。

・担当理事選任の件 (板倉)
支部担当は板倉理事の担当を再確認、書評担当は山本理事、会報担当は近藤理事に選任。

・創立七十周年記念事業準備委員会組織の件
委員設置を了承、責任者として織内副会長を選任、委員会メンバーは織内氏に一任することを了承。

・ウェストン祭、尾崎喜八氏追悼会の件 (伊倉)
横名誉会員に本会代表として追悼演説を願うことにした。了承

△その他(連絡事項)
・ルーム退出時間について (伊倉)
午後十時の退出時間を厳守されたい了承

△報告事項
・集会委員会昭和四十九年度予定方針 新旧会員の親睦、支部との懇親 (神崎)

定例会 集会委員会、毎月第一月曜日
連絡来室日、毎週月曜日
定例小集会、毎月二十日

年間計画
第三〇六回 五月二十日(月) カンジロバ(北里大)

第三〇七回 六月九日(日) 中部地区支部懇談会

第三〇八回 六月二十日(木) エベレスト南壁

第三〇九回 八月三十日(金) ヤルンカン(日大)

第三一〇回 九月十日(火) ジャズ(成城大)

第三一一回 九月十五日―十六日(日) 支部との親睦

第三一二回 九月二十日(金) マナス

ル(女子)

第三一二回 十月二十日(日) 丹沢、沢登り集中

第三一四回 十一月二十日(水) 会員懇談会

第三一五回 十二月十五日(日) モチツキ

第三一六回 十二月二十日(金) 忘年会(婦人懇談会と合同)

第三一七回 一月十四日―十五日(火) スキー親睦会

第三一八回 二月二十日(木) グルジャ(青学大)

・青少年野外活動センターに対する名義後援の件 (山崎)
了承

図書室便り (昭和49・5)

新刊図書受入報告

朝日新聞社寄贈
(1)『深田久弥山の文学全集 I わが山々』昭和49

(2)『深田久弥山の文学全集 II 山頂山麓』昭和49

(3)『深田久弥山の文学全集 III わが愛する山々』昭和49

(4)『日本交通社寄贈
(1)福田宏年著『山のこころ』昭和49

(2)立原正秋著『風景と慰藉』昭和49
毎日新聞社寄贈

(1)横有恒著『山の心』昭和49
松本高校山岳部寄贈

(1)松本高校山岳部『わらち 第4号』(複製版) 昭和48

成美堂出版寄贈
(1)小林俊樹著『アルプス一万尺のふみ跡をたずねて』昭和49

金井五郎氏寄贈
(1)秀岳荘編『山の素描 第一集 No. 1』昭和47

横有恒氏寄贈
(1)『50』昭和37

(1)横有恒著『山の心』毎日新聞社 昭和49

水野勉氏寄贈
(1)マルセル・クルツ著 水野勉訳『ヒッパヤ編年誌 I』(1940~1946) 日本山書の会 昭和49

定期刊行物受入報告
【部報・会報】

(1)山村民俗の会『あしなな』No. 141 (49-5)

(2)東京学芸大学工学部山岳部『やまけん』No. 1 (49-5)

(3)兵庫県山岳連盟『兵庫山岳』No. 48 (49-5)

(4)『いづみの山岳会月報』No. 153 (49-5)

(5)日本地質資料協会『古地図研究』No. 50 (49-4)

(6)国立公園協会『国立公園』No. 293 (49-4)

(7)京都山岳会『京都山岳』No. 589 (49-5)

(8)東京野歩路会『山嶺』No. 529 (49-5)

(9)日本自然保護協会『自然保護』No. 143 (49-4)

(10)低く山を歩く会『低山』No. 106, 107 (41-4-5)

(11)『東京都立大学山岳部報』No. 5 (49-4)

(12)日本登山協会『山と雪』No. 192 (49-5)

【雑誌】
(1)『アルプ』No. 195 (74-5)

(2)『地図』Vol. 12 No. 1 1974

(3)『岳人』No. 324 (74-6)

(4)『岩と雪』No. 37 (Summer 74)

(5)『山と溪谷』No. 429 (74-6) 【その他】
長野県山岳総合センター寄贈
(1)長野県山岳総合センター編『登山資料一学校編』昭和48年度 昭和49

洋書受入報告

B. Arthaud 寄贈

1) Sous la direction de Claude et Philippe Trayanard 『Siti de montagne』 B. Arthaud, 1974.
〔海外雑誌〕

1. "Die Alpen" N. 3. März '74.
2. "Die Alpen" 50. Jahrg. 50. 1. Quartal.
3. "Alpinismus" 74-3, 4.
4. "Appalachia" Vol. 39, No. 4. Dec. '73.

5. "Der Bergsteiger" 74-3.
6. "Deutscher Alpenverein. Mitteilungen" 26. Jahrg. Heft. 2. März/April '74.
7. "La Montagne et alpinisme" 100. année, no. 96, '74-1.

8. "Mountain" No. 32. February '74.
9. "Penalara Hum. 394. Julio-Septiembre 1972 III.
10. "Rivista mensile" Anno 94, N. 11. Novembre '73.

11. "UIAA. Bulletin" No. 58. Mars '74.
12. "The Yorkshire Ramblers Club Journal" Vol. 11, No. 36. 1973.

ルーム日誌 (49年5月)

7日(火) 集会委員会
8日(水) 自然保護委員会
10日(金) 指導委員会
11日(土) 指導委員会
14日(火) 指導委員会
15日(水) 山岳編集委員会
17日(金) 海外連絡委員会
20日(月) 第三〇六回小集会(北里大

学カンジロバ登山報告

隊長 河村栄二氏

22日(水) 常務理事会
24日(金) 自然保護委員会
27日(月) 山研委員会
28日(火) 山日記編集委員会
30日(木) 学生部委員会
31日(金) 青年懇談会委員会
五月中来室者 四二六名

会 員 異 動

改姓
五六五〇 斎藤多美子 旧姓三浦

代表者変更
四七三二 日本曹達二本工場体育会

山岳部 代表 荻野 平八

終身会員
一七五五 折井 健一(四九年五月)

退会
五四七一 信州大学山岳会(四九年四月)

物故会員
四二五二 竜崎 一郎(四九年五月)

七六一〇 鈴木 貞子 昭和四九・五

七四四 神谷 恭 昭和四九・五・二

〇逝去
五員上三行四四六六・電話(〇九六八

六)八〇〇六二
七員上二行一〇七三 千〇六一二

一
六九員下二行五九八〇 千一七五

『山岳』覆刻版シリーズ

山岳第三年第二号ができました。
ルームにて発売中ですからお申込
み下さい。

定価 二、五〇〇円
送料荷造代 二〇〇円

支 部 便 り

一九七四年度

関西支部総会報告

今般左記のとおり支部総会を開催しましたので、ご報告いたします。
日時 49・4・10(水) 一八〜一九時
場所 大阪スポーツマンクラブ
3F集会室

議事
今西支部長あいさつの後、議事に入る。

1 一九七三年度事業報告(竹尾委員)

①第一回月例研究会・六月二七日
アマゾン上流域調査報告
講師 関西大学探検部
藤本幸一氏

(スポーツマンクラブ集会室)

②第二回月例研究会・九月二七日
アンナブルナII峰登頂報告
講師 同峰登山隊長 岩佐氏
(スポーツマンクラブ5F集会室)

③第三回月例研究会・一〇月三〇日
ヤルカン登頂報告
講師 樋口明生氏
(スポーツマンクラブ3F集会室)

④第四回月例研究会・十一月二八日
プロモビーク登頂報告
講師 同峰登山隊長 中村氏
(関西西組会議室)

⑤新年会・一月二五日
住吉仙也氏によるエベレスト南壁
登山報告(住友クラブ)

⑥その他に委員会七回開催
2 一九七三年度会計報告(金井委員)

3 一九七四年度予算案提出
4 一九七四年度役員は、左記のとおり
決定しました。

支部長 今西寿雄
委員 阿部和行、住吉仙也、野村

会費未納の方は至急ご納入下さい!!

哲也、宗実慶子、桑田結、
金井健二、白石裕、林茂、
久野英一郎、竹尾宗和、村
井榮、川田哲二、神山義明
金井良碩、井関扶

監事 二木信次、水野政博

支部評議員 中原繁之助、山口季次
郎、田中薫、小島栄、直木

重一郎、加納一朗、栗飯原
健三、二木信次、四谷竜

津田周二、今西錦司、水野
祥太郎、中村勝郎、児島勤

次、浅井東一、富田健一、
橋真琴、篠田軍治、田中栄

蔵、仲西政一郎、桑原武夫
ほか、総会の催しとして、中村勝郎

氏による関西支部創立当時を顧みて
というテーマの話をたのしくうがっ

た。

一九七四年度

静岡支部総会報告

このたび、左記のとおり総会を開催
いたしました。

日時 49・4・13(土)

場所 静岡市 法伝寺

議事
1 昭和四十八年度事業報告

・48年4月14日 支部総会および報告
会「バトラシ・ヒマール カンデ

・ヒュンチュリ」遠征報告者桑
畑氏

・5月12日 二士会

・6月9日 二士会 紅葉会場 大日
山に決定

・7月14日 ビール会 岩永英雄氏宅
にて

・9月8日 月見の会 牛妻荻野恭一
氏宅にて

・10月6日 二士会 紅葉会打合せ会

高頭仁兵衛祭のお知らせ

越後支部

昭和二十五年五月二十日、越後一
之宮弥彦山頂の一石を刻んで高頭仁
兵衛翁の肖像を掲げてから二十五
年。

志を同じうする岳人が郷土の山の
先蹤者の温心に接見し、その不撓不

屈の登高心を偲ぶとともに、その不撓不
屈の登高心を偲ぶとともに、その不撓不

屈の登高心を偲ぶとともに、その不撓不
屈の登高心を偲ぶとともに、その不撓不

屈の登高心を偲ぶとともに、その不撓不
屈の登高心を偲ぶとともに、その不撓不

屈の登高心を偲ぶとともに、その不撓不
屈の登高心を偲ぶとともに、その不撓不

屈の登高心を偲ぶとともに、その不撓不
屈の登高心を偲ぶとともに、その不撓不

屈の登高心を偲ぶとともに、その不撓不
屈の登高心を偲ぶとともに、その不撓不

屈の登高心を偲ぶとともに、その不撓不
屈の登高心を偲ぶとともに、その不撓不

屈の登高心を偲ぶとともに、その不撓不
屈の登高心を偲ぶとともに、その不撓不

屈の登高心を偲ぶとともに、その不撓不
屈の登高心を偲ぶとともに、その不撓不

屈の登高心を偲ぶとともに、その不撓不
屈の登高心を偲ぶとともに、その不撓不

屈の登高心を偲ぶとともに、その不撓不
屈の登高心を偲ぶとともに、その不撓不

屈の登高心を偲ぶとともに、その不撓不
屈の登高心を偲ぶとともに、その不撓不

屈の登高心を偲ぶとともに、その不撓不
屈の登高心を偲ぶとともに、その不撓不

屈の登高心を偲ぶとともに、その不撓不
屈の登高心を偲ぶとともに、その不撓不

屈の登高心を偲ぶとともに、その不撓不
屈の登高心を偲ぶとともに、その不撓不

屈の登高心を偲ぶとともに、その不撓不
屈の登高心を偲ぶとともに、その不撓不

屈の登高心を偲ぶとともに、その不撓不
屈の登高心を偲ぶとともに、その不撓不

屈の登高心を偲ぶとともに、その不撓不
屈の登高心を偲ぶとともに、その不撓不

屈の登高心を偲ぶとともに、その不撓不
屈の登高心を偲ぶとともに、その不撓不

蘇郡一の宮町宮地の初代支部長故北田正三氏宅で行った。

北田正三氏が昭和三十三年七月二十七日、阿蘇高岳鷲が峰で遭難死されてからすでに十六年の歳月が流れ、われわれ支部会員はもちろん、岳連関係者等熊本をはじめ九州各地から多くの岳人が足を運んでいた当時の聖山荘も今は奥さんが一人保育園を経営し、（先生が在世中から経営されていた）幼い子供たちとの毎日を送っていられた。死に以来も時折り訪ねていたこれらの人達は歳月の流れとともに次第に減り、今では奥さんは当時を偲び淋しく思っていると思われるので、春の総会には皆で奥さんを訪ねてみようということになりここに決めた次第である。あいにく両日とも雨となつた、出席会員は北田未亡人を雨で九名であったが、奥さんは久しぶりにわれわれの来訪とあつて心から喜ばれていた。また熊本支部も昭和三十二年七月十三日のこの聖山荘で結成の産ぶ声をあげているが、今年は十七年を迎える宮地で総会を行ったのも創立以来久しぶりである。設立当時を偲んで当時の記録簿を開いて語りあつたが感慨深かつた。

夕方五時の参集であつたが、會員の中からは早くから来て雨の中を高岳仙酔峽からはロブウエーで山上に登つてきた者もあつて、(首藤、平川)六時半より会食に入り懇談に移つた。一同は毎回集る顔ぶれではあるが、(大田末熊本、高千穂、雲仙小浜から)、北田未人人を囲み、話は早くも北田前支部長のよめやま話に花が咲いてゐた。八時頃地元の岳人阿蘇の自然を守る会の幸仁哉氏に来ていただき、近年登山道として外輪山の採石場や南阿蘇公園沿路の建設等自然保護対策の話や、高岳の遭難碑取り扱ひの経過など有意義な

話をうかがった。

翌日も雨が残り、予定では北田正三氏の遭難レリーフがある高岳地獄谷の関門まで行くことにしていたが、行けず、宮地で先生の墓に墓参のあと北田未亡人も一緒に仙酔峡まで行き、丁度見頃のミヤマキリシマの開花を観賞し、鷺見平まで登り高岳遭難者の遭難碑にたずずんで解散した。

なお、今年は六月十八日(予定)熊本市内で熊本市内の会員を中心に親睦を図るため「語ろう会」を開く計画でいるが、熊本市内に限らず遠近の会員の出席をのぞんでいる。また秋の例会は雲仙地区で行う。

★上高地山岳研究所建築資金

応募者氏名

片岡 博10、菅野弘章3、島 汀子3、大阪大学山岳会10、宮原弘之3、田村聡明3、黒米政二3、望月計市5、芳野超夫5、今西錦司50、原 蕃10、星 勝雄2、八巻 功5、額田 敏10、高尾徹繁2、岡部紀正5、木村俊博5、金井五郎6.5、浅輪幸久10、原 喜彬10、小木曾章男5、松本徳夫3、泉尾忠志10、花崎 洋3、岩野暢夫5、木本善重2、池田知幸10、前田宗寿10

なお、上高地山岳研究所は、過日の会員総会で林和夫山研運営委員長の説明のように物価高その他で、当初計画より四四〇万円程増大したので、会員各位の一層の協力をお願い致します。

ノレンと灰皿発売中

(1)深田久弥氏筆 ノレン

定価 一、〇〇〇円

送料 四〇円

(2)JACマーク入り

携帯用 灰皿(赤、黒二色)

定価 五〇〇円

送料 七〇円

ルームに申し込み下さい。